

令和6年度園評価書

園番号26園名 静岡市立広野こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
笑顔あふれる 元気な子	「だいすき」な遊びを見つけ夢中になって遊ぶ	自分のやりたい遊びを見つけ、考えたり試したりしながら夢中になって遊んでいる	○・小さい子でも自由に水・泥・泡などに触れて自分がイメージした遊びを展開させていき、「あれしたい」「あれがほしい」と思いを実現するために保育者に言葉やしぐさで伝える姿がある。・興味のある遊びをやってみようとする気持ちが強くなり、年上の子の遊びをよく見て、それを自分なりにアレンジして遊ぶ姿（ままごとや砂場遊びなど）や、自分がやりたいことがうまくできなくても何度も試行錯誤しながら考えて遊ぶ姿（板を斜めにかけて外れないように工夫・マルチパネの組み方を工夫など）が増えた。 ●うまくいかないことを『失敗しちゃう』と捉える子もいるため、まずは「やってみよう」とチャレンジしたり試したりする過程も楽しめるようになってほしい	A	A	・園庭の環境は充実してきていると思います ・お部屋は、まだ遊びの途中なのかかもしれないが雑然とした印象を受けた ・自然物を多く取り入れていて発想豊かに遊んでいる。自然がたくさんある場所なので恵まれている環境。子ども達がのびのび遊んでいる印象を受けた ・保育者が思いをくみながら、“あぶないからやめな”と言うのではなく、危ない所は手を貸してチャレンジする気持ちを大事にしているところが良い	○子どもが好きな遊びを楽しむ中で、“こうしてみよう”と試せる環境を用意する。保育者も一緒に遊ぶ中でタイミングを考えて物を提供できるように準備をしておく ○保育者が、子どもが考える前に言葉をかけてしまったり、仲介に入り解決しようとしてしまう所がある。子ども自身が考えて自分たちの言葉で伝えられるように関わっていく。また、自己主張し合う中で相手の気持ちに気づけるように支援していく ○子ども達が繰り返し遊んだり試行錯誤したり出来るよう十分なあそびの時間と場所の確保をする ○片付けでは、自分から片づけようとする気持ちが持てるよう、遊びきる体験をしていく。また、片づけやすい環境を皆で整えていく
		友だちと一緒にいる事と一緒に遊ぶことを楽しいと感じ安心して生活している	○乳児から友だちの存在を気かけ、子ども同士で誘い合う姿が見られる。異年齢間の自然なかかわりも生まれ、年上児への憧れ、小さい子をかわいいと思う気持ちや、お手伝いをしてあげたい、一緒にいたいという気持ちが感じられる。年中長児になると、目的に向かって友達と話し合い、役割を決めて協力し協同的な遊びが展開されるようになっていく ●トラブルが起きた時に話し合う術を持っていない子が多い。保育者が仲介しすぎてしまっているのかもしれない	A	A		
		思いや考えを自分なりの表現で、保育者や友達に伝えようとする姿がある	○自分のやりたい気持ちを言葉やしぐさで伝え、思うようにいかないと全身でいやだという思いを表現できている。以前は「○○していい？」と聞いてくる子が多かったが、保育者が一人ひとりの思いにじっくり関わり思いを十分に聴くように心がけていったことで「○○したい」と思いを主張できる子が増えた ●しかし自分の思いを主張しきれない子や、乱暴な言葉や態度で友だちを傷つけてしまう子もいる。成長過程の中で、相手の思いに気づき適切な表現ができるような支援をしていきたい	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達の道筋を理解し、個人差に配慮して一人ひとりの興味や発達に合った対応や環境が用意されている	・園内研修で一人ひとりの育ちについて共有し、その子への関わりやねらいを明確にして皆で語り合うことができた。子どもの発達や育ちに合わせて、クラスごとに遊び図を作り、職員間でそれを共有し、遊びに合わせた環境を作るように努めた	A	A	・環境は良い線までいっているのでAでもよいと思うが、保育者が“もっとやりたい”という思いからBにしたのなら期待を込めてBのままでも良いと思う ・基本的生活習慣について6年間の継続した関わりの中で年齢ごとここまでは身につけたいという抑えを共通理解し、援助の仕方を個々に合わせ工夫していく	○職員間で発達の道筋を理解してその学年でつくれる力を意識して関わっていくことを共有する（ピーチトークの時間の確保）→職員が一貫性をもってかかわれるようにする ○乳児・幼児会議で子どもの姿を共有する
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	様々な家庭環境がある事を理解し、子どもが集団生活の中で出来るだけゆったりと安心して過ごせるようにしている	・事務室に続くウッドデッキや、事務室内に遊ぶ場を用意し、子どものペースで静や動の遊びが選択できるような環境を用意した。早番、遅番の子には、特にゆったりと安心して遊べるような対応を心がけた。また、遅い登園の子には、温かく保育者が迎え入れ、安心して友だちの遊びや活動に入っていけるようにしていった。環境の再構成では、子どもの遊びの様子にあわせて、見通しをもって準備を進め、季節の自然物や素材を取り入れるなどし、各学年の発達に合わせたねらいをもって、拠点作りを意識した。しかし、遊んだ後の片付けに課題が多い	A	A		○早番・遅番より密な連絡を取り合う ○事例検討を全職員で共有し、安心して生活できるように関わっていく。また、個別支援が必要な家庭には職員が個別対応をせず、どのようにアプローチをしていくのか園内で共有する
	(3)環境を通して行う教育及び保育	やりたい事、やってみたい事が自分で楽しめるよう、発達や興味関心に合わせて、種類・量を考えて教材や素材が提供されている	・ロープ、丸太や木材、コンテナやマルチパネ、スラックライン、ピオトープづくりなど、子どもたちがより楽しく主体的に遊べるように園庭の環境を考えていった。環境の再構成では、子どもの遊びの様子にあわせて、見通しをもって準備を進め、季節の自然物や素材を取り入れるなどし、各学年の発達に合わせたねらいをもって、拠点作りを意識した。しかし、遊んだ後の片付けに課題が多い	B	B		○遊び図を活用して保育者が遊びの展開をイメージできるようにする ○子どもの遊びに見通しをもって環境の再構成ができるようタイミングを考えて関わっていく ○教材研究をする際は、会計年度職員も一体となって環境作りをする ○子どもの興味から必要なものを全職員で、集めたり、保護者も巻き込み”こうしたら面白いかも””こうしてみたら・・・”と楽しもうとする気持ちで環境構成をする
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	想定される災害時に取るべき行動を一人ひとりが理解し、職員間で連携して避難、誘導ができている	・『防災教育』の研修で職員が知識を学び、毎月の避難訓練で正しい判断力を身につけられるように、具体的な地震の揺れの大きさなどを想定して実施している。防災教育をもとに自分の身は自分で守るという姿勢も子ども達にその都度伝えている。不審者訓練では合言葉の見直しを行い、全職員で共通理解をした	A	A	・分掌の担当者が毎年変わり、日々、忙しい中で、分掌のことを進める時間を確保することが難しいのはよくわかります。その中でどのように連携よくやっていくか課題ですね ・分掌は、頑張っているからAでもよいのではないかと思います ・会計年度任用職員が多く、正規率が3分の1という数に驚きました。小学校の教員は基本、正規がほとんどです。そのような中で分掌を行っていくことは大変だなと予想しました。分掌の評価は、会計年度任用職員が多いということを静岡市に知らせるためにもBでよいのではないかと ・“ピーチトークの会”という名目がよい。時間がながい中、なかなかやれないのは仕方ない。しかし、語り合いをやらうと企画をした事と、普段から日々語り合っていることが良い ・ヒヤリハットは多いのは良くないと思っていたが、大きなけがを防ぐためにはヒヤリハットの記録を共有する大切さがわかった ・ヒヤリハットの数が少ないのは、保育中”あぶない”と思っても、記録する時間がないことはよくわかる。けがまで入っているヒヤリハットもあるとのこと。皆でヒヤリハットの意味を共有するとういと思う ・安全面では、子どもたちの意識の中に気を付けようと思える年齢があり、その発達年齢に合わせた見守りや支援が大切 ・孫の迎え時、その日の遊びのお知らせボードを今まではスマホで写真を撮って母親に送っていたが、それもなくなり、確実にその日の様子が送られてきて便利になったと感じている。コドモンによる配信はとても良いことだと思う	○職員間で発達の道筋を理解してその学年でつくれる力を意識して関わっていくことを共有する（ピーチトークの時間の確保）→職員が一貫性をもってかかわれるようにする ○乳児・幼児会議で子どもの姿を共有する
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	身の回りの健康習慣が身につくように、その年齢に合った丁寧なかかわりが出来ている	・年齢や発達に合わせ、基本的生活習慣が身に付くよう指導している。特に、食育では、毎月のつどいや栽培活動を通して食への関心が高まっている。衛生面では、手洗いの際傍につき石鹸を使ってしっかり洗うように見守っている。年長児には、ハンカチを持ってくる習慣が身につくように声をかけ、以前に比べてハン	A	A		○基本的生活習慣等について各年齢でその学年で押さえたいことを共有し、次年度にスムーズに移行できるようにする ○子ども達がよい生活習慣を身に着けられるように、心に余裕をもって時間の確保をし、やり方を見守っていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	誰もが区別や差別なく、仲間として共に育っていけるような園の雰囲気づくりと、職員の意識づくりができている	・会議に参加できなかった職員も、後でケース検討の場（特別な支援を必要とする乳児組の子への手だても含め）を設け、子どもへの関わり方について話し合う時間をもつことで、園全体で支援するという意識が高まり、活発な意見が出るようになってきている。様々な研修に参加し学びを共有したり、クローバーの会（遊びの会）を毎月実施し振り返りを行うことで職員のスキルも上がっている	A	A		○学年が上がった時に戸惑わないように支援の教材をどのクラスも共通して使えるようにする ○特別支援コーディネーターやクラスリーダーも支援会議やサポートプラン作成、支援児の会に関わっていけるようにする ○合理的配慮について研修を行いスキルを上げる・支援児の会では、個々の子どもの育てたいねらいを明確にして会の準備を進める
5 組織運営	(1)組織体制の充実	自分の役割を理解し責任をもって遂行しながら、皆で協力し合い各分掌に取り組んでいる	・各分掌についてはリーダーが責任を持って取り組み、年間計画をもとに早めの準備をしている。皆で協力して園経営に携わっているという意識が持てるようになってきているが、パート職員が多く、話し合いや準備の時間がなかなか持てない分掌もある	B	B	・年5回の研究保育（公開保育）を通して「子どもが自分から遊びたくなる環境の工夫」をテーマに研修を行った。わくわくする環境をめざし、発達にあった遊具や用具の提供の仕方、保育者のかかわり方について話し合いを重ね、学びが深まったと感じている。日頃からクラスの職員間では子どもの事について語り合うことができているものの、もっと気軽に職員同士で語り合いたいと思い「ピーチトークの会」を設けたが、時間の確保が難しい ・年度当初、園内のハザードマップを作成し優先順位をつけて改善に努めた。ヒヤリハットは年4回、集計・分析し、原因や改善点を職員会議の中で話し合い共有した。ヒヤリハットの数が少ないのが課題である。	○正規、パート職員関係なく皆で分掌に積極的に関われるように、話し合いの時間の確保をし計画的に進めていく ○全体的計画を細かく立てる。内容については職員会議にて検討して企画に生かしていく
6 研 修	(1)研修体制の充実	研修部を中心に年間計画に沿って園内研修が実施され、子どもたちの「わくわくした思い」につながるよう職員間での語り合いを大切にしている	・年5回の研究保育（公開保育）を通して「子どもが自分から遊びたくなる環境の工夫」をテーマに研修を行った。わくわくする環境をめざし、発達にあった遊具や用具の提供の仕方、保育者のかかわり方について話し合いを重ね、学びが深まったと感じている。日頃からクラスの職員間では子どもの事について語り合うことができているものの、もっと気軽に職員同士で語り合いたいと思い「ピーチトークの会」を設けたが、時間の確保が難しい	B	A		○週1回の語り合い（ピーチトーク）を行い、子どもが何を感じているか、楽しんでいるかを気軽に語り合える時間の確保をする ○保育者が友達とのつながりを支える言葉がけや声の大きさやトーンに気を付け、子どもを肯定的に捉えられるように園内研修を行っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	ヒヤリハットやハザードマップ・遊びだしの環境の検討を行い、安心安全な環境づくりに努めている	・年度当初、園内のハザードマップを作成し優先順位をつけて改善に努めた。ヒヤリハットは年4回、集計・分析し、原因や改善点を職員会議の中で話し合い共有した。ヒヤリハットの数が少ないのが課題である。	B	B		○気づいたらすぐに記録をとり、職員全体に周知をして意識の向上を図る。分掌が責任をもって職員に声をかけヒヤリハットを確実に回収していく ○4月、新職員に新しい目で見てもらいハザードマップを作り危険箇所を見直す
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	IT化する中で保護者に伝わりやすい文章や内容を考え、園の保育を理解してもらえるよう努めている	・コドモンでの「お知らせボード」の配信が1月より始まった。遊びの様子がわかりやすい写真を選び、スマホの画面上でも見やすく、それを読んでも子どもの様子が想像しやすい文章を心がけている。乳児の連絡帳機能に個人の写真を載せられるようになり好評。園だよりでは、なるべくわかりやすい表現で子どもの姿や園としての願いを伝えるよう、またクラスだよりでは保育のねらいや遊びの過程を丁寧に伝えるよう努めている	A	A	・園庭の見所や遊べる場所がわかるお散歩マップを作成し、教育・保育に生かし有効利用をしていく ○職員が、“地域”やE S Dに関心を持ち、子ども達からが地域に親しみや興味が持てるように関わっていく	○お知らせボードやお便りにて教育・保育のねらいや過程についても伝えていく ○登降園時の保護者とのコミュニケーションを大切に
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣園や近隣小学校とのつながりを大切にし、学校探検や公開保育・公開授業を通して連携を図っている	・長田5ヶ園交流（年長児）が活発に行われる中で、近隣園との交流が深まり、地域の子どものつながりができてきた。その中で小学校教諭に講演を依頼し、小学校の様子や卒園後の子どもの育ちを知る機会があり、園と学校との連携の大切さを改めて感じた。来年度は教育課程の中にそれら組み込んでいきたい	A	A		○年度当初から話し合いの場を持ち、校庭や園庭探索、交流ができるように計画をする。できる限り学校の授業参観・公開授業後の職員研修に参加をする ○年度当初にスタートカリキュラムとアプローチカリキュラムのすり合わせができるよう、検討の時期を決めておく ○近隣園との関わりでは年長から各学年へと広げて交流を深めていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	散歩に出かけ地域の方々と挨拶を交わしたり、地域の様々な行事に参加したりする中で、職員や子ども達に地域への親しみが深まってきている	・散歩に出かけ地域の人とあいさつをしたりハイタッチをしたりすることが多くなった。地区敬老会への参加や、ももクラブの方とのふれあい、広野文化展への作品展示、広野病院への慰問などで地域の皆さんとかかわり優しい言葉をかけていただいたことで、温かさを感じることができ、さらに地域への親しみが増してきている。また地域の方から提供していただいていた廃材や、ひのきチップ・クリスマスツリーなどで子どもたちの経験の幅が広がっている	A	A		○地域の見所や遊べる場所がわかるお散歩マップを作成し、教育・保育に生かし有効利用をしていく ○職員が、“地域”やE S Dに関心を持ち、子ども達からが地域に親しみや興味が持てるように関わっていく